

# 世界史 で育む読解力

## 資料を読み解くプロセスを整理し、 歴史を解釈・批判する力を育む

### 埼玉県・私立立教新座中学校・高校

世界史を担当する立教新座中学校・高校の荒井雅子先生は、PISA型読解力を基に、非連続型テキストなどの読解のプロセスを整理。読解のレベルを徐々に深化させていく。スモールステップの問いにより、歴史を解釈・批判する力の育成を図っている。

### PISA型読解力のステップを 援用し、資料を読み解かせる

立教新座中学校・高校の荒井雅子先生は、世界史の授業で、図表などの非連続型テキストを含む様々な資料の読み解きを通して、PISA型読解力と歴史を解釈・批判する力の育成を図っている。

荒井先生がPISA型読解力の育成を意識し始めたきっかけは、2011年、独立行政法人国際協力機構が実施する教師海外研修で、「フォトランゲージ」という学習手法を知ったことだった。フォトランゲージは、写真や絵の中の情報を読み取り、自分の意見を明らかにしていくもので、分かっただけで考えたことを他者と共有しながら

共通理解を図る。

荒井先生は、世界史で扱う図表など、文字化されていないテキストを読み解くためにフォトランゲージは有効だと考えた。だが、その手法を用いて生徒が資料の読み解きに取り組んだところ、文脈や背景を理解した上で自分の考えを述べることができる者もいれば、表面的な情報を追っただけで精いっぱいいる者もいて、生徒ごとに読解の深さは異なった。

「資料を読み解くプロセスを突き詰める中で、PISA型読解力の『情報の取り出し』『解釈』『熟考・評価』のステップに着目しました。そのステップを非連続型テキストの読解に援用することで（図1）、広い視野に立ち、国際社会に主体的に生きる『公民とし

図1

#### PISA型読解力のステップを援用した 非連続型テキストの読解

- ①情報の取り出し テキストに書かれている情報を正確に取り出すこと
- ②解釈 書かれた情報がどのような意味を持つかを理解したり、推論したりすること
- ③熟考・評価 テキストに書かれたことを知識や考え方、経験と結びつけること

※荒井先生の提供資料を基に編集部で作成。

ての資質・能力』の育成につながるような読解力が得られると考えました」  
様々な状況の生徒が読解を深められるよう、荒井先生は「スモールステップ」の問いの設定を心がけている。「スモールステップの問いは、『何が書かれているか（情報の取り出し）』

#### 学校概要

設立 1874（明治7）年  
形態 全日制／普通科／男子校  
生徒数 1学年約320人  
2022年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、東京工業大、東京大、一橋大、横浜国立大などに10人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、立教大、早稲田大などに延べ342人が合格。

教諭

荒井雅子

あらい・まさこ  
同校に赴任して24年目。地理歴史・公民科（世界史）。

※プロフィールは、2024年3月時点のものです。

と『あなたはどうか考えるか（解釈及び  
熟考・評価）』の2つに大きく分けら  
れます。情報の取り出しで止まってい  
る生徒には、『今、あなたが書き出し  
た情報からは、どんなことが読み取れ  
る？』などと問いかけ、次のステップ  
に進むサポートをします」

「あなたはどうか考えるか」という問  
いが求めるレベルは、解釈にとどまる  
場合もあれば、熟考・評価まで求める  
こともある。どのレベルの問いを設定  
するかは、学習するテーマや資料など  
に応じて荒井先生が判断している。ま  
た、解釈と一口に言っても、「書かれ  
ている情報を深く理解する」「その時  
代のほかの事象とつなげる」「既習の  
内容と結びつける」など、多くの方向  
性がある。そのため、どのような解釈  
を求めるかを意識して、丁寧に問いを  
設定している。

**論述では「事実立脚性」と  
「論理整合性」を重視**

荒井先生が実践した「アテネの家族」  
をテーマとした課題を通して、スモー  
ルステップの問いの流れを具体的に  
見ていく（課題1）。

同課題では、古代ギリシアのアテネ  
における性別による役割の違いを様々

**課題1 「アテネの家族」**

**【ねらい】**

- アテネの男女それぞれの役割を確認してジェンダーバイアスに気づき、その裏づけとなる資料との関係性を探らせる。その過程で、ある時代に期待される性別役割は同時代の社会・文化的背景の影響を受けることを考えさせる。
- 現代の家族のあり方など、自分の知識や経験と結びつけて考えることで、アテネの時代性や価値観を浮かび上がらせるとともに、現代を相対的に捉える視点を養っていく。

**問1** 資料1には、どのような人々が描かれているか。性別、年齢、服装、想像できる役割や立場など、絵に描かれていること（または描かれていることから想像した情報）を文字化しましょう。

**情報の取り出し**

**〈資料1 壺絵の拡大図〉**

アテネの家族が描かれた壺絵。



**問2** ①資料2を読んで、描かれている人にはどのような社会的役割、家庭内の役割が期待されていたのか、書きましょう。  
②それぞれの情報をグループで共有しましょう。  
③君たちが知っている家族の姿と、どこがどのように異なるのか、文章にしてみましょう。

**熟考・評価**

**〈資料2 壺絵の解説文〉**

大英博物館による壺絵の解説文を日本語に翻訳した文章。壺に描かれた「年上の男性」「年下の男性」「女性」について、「最年長の男性は、オイコス（家）の幸せに責任を持つ立場にあった」「若い男性は、市民と家族の長としての役割を期待されて教育を受けた」「女性には家庭を経営し、子どもを生むという2つの責任があった」など、様々な記述を紹介。

**問3** 資料3に示された5つの史料は、資料2に示されているどの性別の、どのような立場の根拠となりそうか、資料2に下線を引きましょう。

**情報の取り出し**

**〈資料3 ギリシア時代のジェンダーに関する史料〉**

『歴史を読み替える ジェンダーから見た世界史』（大月書店）を参考に、ヘーシオドス『神統記』、アリストテレス『政治学』などから、ギリシア時代のジェンダーに関する記述を抜き出した5つの史料を提示。

**問4** 次の質問に答えましょう。

歴史の学習は、現在の視点から過去を眺めるものです。今日のテーマに即せば、皆さんは現在の家族観という視点から、ギリシア時代の家族を眺めている、ということになります。つまり、今の我々の思考は、この時代の価値観から離れることができないのです。しかし、自分の思考が時代の価値観に制約されているという可能性を理解することは、その価値観を相対化する助けになります。

さて、ギリシア時代の人々もそんな価値観にとらわれていた、としましょう。それはどのような価値観だったのでしょうか？「ある時代に期待される性別役割は同時代の社会的・文化的背景に影響を受けており、家族の背後にはその時代の価値観が控えている」という意見について、あなたはどの程度賛成（または反対）しますか？ 賛成／反対の立場を明示して、それぞれその根拠を示して意見を述べなさい。

**解釈**

この意見に関して、おおむね賛成します。  
この時代に生きる男性がなぜこんなにも強い権限を持っていたのかというのは、「生来与えられたものであった」などに見られるとおり先祖代々こうだから、という理由に帰因します。つまり主体性を持って「自分がこうしたいからこうする」よりは共同体の秩序を優先しようとしたからだと考えます。しかし今を生きる僕らは彼らと違って「自分が客観的に見てどのような存在であるか」というのを理解しています。だからこそ、自分の一言で共同体の秩序が...とは考えず、自由に物事をとらえられるのではないでしょう。それは文明が発達している今の世界の人だからこそ分かることではないでしょうか。

**生徒の記述**

※荒井先生の提供資料を基に編集部で作成。

な資料から読み解く中で、ジェンダーバイアスに気づかせ、性別による役割の違いは、その時代の社会的・文化的背景の影響を受けることを考えさせられた。

最初に非連続型テキストからの情報の取り出しとして、複数の人物が描かれたアテネの壺絵から分かることをワークシートに記述させた(問1)。性別や年齢、服装などのほか、それぞれの人物の役割や立場など、想像できることも記述するように生徒に求めた。

続いて、文字資料からの情報の取り出しとして、壺絵の解説文から、性別による社会的役割や家庭内での働きの違いなどが記述された箇所を読み取らせた(問2①②)。ここまでの作業を通して、男性が市民や世帯の長となることを期待されて教育を受けた一方で、女性の役割は家庭内に限定されていたことなど、壺絵から読み取った情報に興味づけをしていった。

次の問い(問2③)では、前の問いまでに読み取ったアテネの性別による役割の違いは、自分の知る家族の姿とどこがどのように異なるのかを比較して文章にした。読解のステップとしては熟考・評価だ。自分の知識や経験を基に家族像を比較し、思考を深めた生徒からは「現代よりも、当時の家族は

精神的なつながりを大事にしていたのではないか。お互いを信頼しているからこそ、内と外の明確な線引きができたのではないか」といった意見が挙がった。

次に、男性観や女性観が表れている当時の著作物など、複数の資料を提示し、同時代の人のまなざしや時代の制約についての理解を深めさせた(問3)。ここでは、最後のまとめに必要な情報を取り出させた。

まとめでは、「ある時代に期待される性別役割は同時代の社会的・文化的背景に影響を受けている」という意見について、根拠に基づいて自分の考えを論述する問いを設定(問4)。読解のステップとしては解釈だ。ここまでの学習を踏まえて、当時のアテネの価値観に立脚して思考を深める様子が生徒に見られ、例えば「概ね賛成する。男性の強い権限は『生来与えられたものであった』などの記述に見られる通り、先祖代々のものだった。そうした共同体の秩序を優先したものと考える」といった考えを述べる生徒もいた。

「探究的な問いでは、全面的に賛成、あるいは反対というケースはほとんどありません。そこで『自分はこの部分に賛成する。なぜなら……』と根拠を示すことを求めました。そうしたアウ

トプットを通して、事実に基づいて語る『事実立脚性』、及び主張と根拠の間に矛盾のない『論理整合性』の2つの視点を育てたいと考えています」

### 「立場性」などの観点から資料を批判的に吟味させる

荒井先生は歴史を解釈・批判する力を育む中で、特に資料を批判的に読む力を育成することを重視している。

「批判的に資料を吟味する視点を持たないと、書かれている情報を疑いなく受け入れることになります。これまでの日本の歴史教育ではあまり力を入れてこなかった批判的に読ませる学習は、生徒が社会で生きていく上で必要な資質・能力を身につけるために、今は不可欠であると捉えています」

批判的に読む姿勢が身につけていない生徒は、短絡的な思考に陥ってしまうケースがある。「世界史探究」の授業で、コルテスによるアステカ征服を扱った際、筆者の異なる2種類の一次史料を提示した。一方の史料にはアステカ王国の王は協力的だったと書かれ、もう一方には非協力的だったと書かれていたが、それを読んで「どちらかが嘘をついている」と発言した生徒がいた。

「その発言を聞いた時、資料を批判的に読む力が生徒に不足していることを痛感しました。同じ出来事であっても、立場の違いによって書き方はいくらでも変わるといって『立場性』をしっかりと理解させる必要があると改めて感じました」

資料を批判的に読むことは、読解のステップの準備段階と位置づけている。資料の立場性を十分に理解できると、その資料の文脈や背景がスムーズに捉えられ、解釈や熟考・評価などがしやすくなるからだ。

### 資料の一面だけで判断せず、多面的・多角的な解釈を求める

立場性を理解することの重要性を伝える課題が、戦時下の旧制立教中学校をテーマとした「戦時体制化と学生・生徒」だ(課題2)。

同課題で、当時の校長が戦争に対して協力的な考えを述べた学内誌の文章(資料3-1)を読ませたところ、生徒から「校長がこんなことを言うのはおかしい」といった声が上がった一方で、当時の校長の一言一句が軍部に報告されていた事情(資料3-2)を踏まえて、「本当に言いたいことは違っていたのだろう」「立場上、仕方なかっ

読解力とは何か？

たのかもしれない」などと分析する生徒もいた。

「1つの資料の一面だけでなく、複数の資料を基に考えること、さらにそれらの資料が成立した背景や過程なども捉え、多面的・多角的に解釈することの大切さに気づいた生徒が多かったと感じています」

「何が書かれているか」「あなたはどう考えるか」という問いに向き合う中で、着実に生徒のPISA型読解力や歴史を解釈・批判する力は高まってきた。初めは情報の取り出しだけで精いっぱいだった生徒から、「考えが大きく変わった」「自分の中にあつたバイアスに気づいた」といった発言が聞かれることもあった。

「中高生は社会経験が少ないために、自分の知識や経験の範囲で世の中を捉えてしまいがちです。世界史の学びを通して見方・考え方が広がることで、異なる立場に立脚して物事を考えられるようになっていきます」

3年生になると、長い歴史を俯瞰しながら思考を深める姿も見られる。

例えば、ヨーロッパの列強諸国が周辺国を次々に侵略した歴史的事実に関して、「どうして同時代のヨーロッパの人々はその行動が容認されると思ったのか」という問いを投げかけた際、

課題2 「戦時体制化と学生・生徒」

【ねらい】

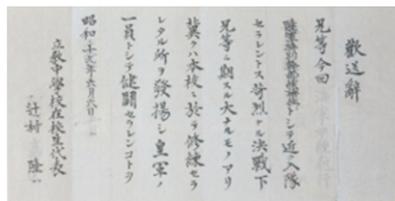
- 太平洋戦争期に学徒動員が進められた背景には、どのような時代の空気や価値観があつたのかを、旧制立教中学校の関連資料などに基づいて考察する。
- 1つの資料だけで判断せず、複数の資料を読み解き、資料の作成者の立場や時代背景を深く理解することで、多面的・多角的に解釈することの大切さに気づかせる。

問1 資料1から、戦争は学校生活にどのような影響を及ぼしていたのか。 **情報の取り出し**

〈資料1 学徒動員の制度的背景〉  
学徒動員が制度化されていく経緯を示した年表を提示。

問2 資料2の歓送辞と答辞を読み、現代語訳しなさい。 **情報の取り出し**

〈資料2 戦争と立教中学生〉  
旧制立教中学校から陸軍・海軍関係学校などに志願した生徒数の推移を説明。さらに生徒の送辞・答辞を提示。



歓送辞  
兄等今回陸軍特別幹部候補生トシテ近ク入隊セラレントス苛烈ナル決戦下兄等二期スル大ナルモノアリ冀クハ本校ニ於テ修練セラレタル所ヲ発揚シ皇軍ノ一員トシテ健闘セラレンコトヲ  
昭和19年6月6日  
立教中学校在校生代表  
出典：立教学院展示館第1回企画展資料『戦時下、立教の日々』

問3 資料3-1、3-2から、学校はどのような形で戦争に協力したと考えられるか、考えてみよう。 **解釈**

〈資料3-1 巻頭言「我らも征く」〉  
戦時に発行された立教中学校の学内誌より、当時の校長が記した巻頭言を提示。「必ず学国の猛勇心は敵を掃蕩し、醜慮の野望を粉碎するであろう。これは我等の責務であると思う。鍛えよこの身体。磨けこの智、振り興せ大和魂。かくて我等も必ず征く。聖戦完勝のために。」などと強い言葉で生徒を鼓舞した。

〈資料3-2 戦時下の学校〉  
戦後に発行された「立教のあゆみ」より、当時の在校生が戦時下を振り返る文章を提示。ミッション・スクールゆえに軍部からにらまれ、校長の一言一句が軍部に報告されていた事情を説明し、「ひとり『立教』だけが『自由の学府』の孤塁を守ることがは不可能であつたらう」「立教の存続に努められた校長先生のご心痛はいかばかりであつたらうか」などと述べた文章。

問4 教育活動が制限される中で、学校はどのように対応したのか/どのように対応せざるを得なかったのか/どう対応すべきだったのか、当時の状況を踏まえた上で、自由と制限の観点から、500字程度で考えなさい。 **熟考・評価**

生徒から「アメリカの西部開拓と共通する考えがあつたのではないかなどと様々な意見が出された。単に覚えて理解したことをアウトプットするのはなく、自分なりの批判や解釈を加え

て相手に分かりやすく論理的に考えを伝える力が育ちつつあるようだ。「複数の資料を読み解きながら各時代について考えるワークを通して生徒の思考を揺さぶり、深められる授業を、

歴史的事実を教える授業とのバランスを取りつつ、今以上に充実させていきたいと思っています」

※荒井先生の提供資料を基に編集部で作成。